

平成21年 5月25日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520181

研究課題名（和文） 20世紀後半のロシア・中欧における非公式芸術の総合的研究

研究課題名（英文） A general study about the unofficial art in Russia and Central Europe in the latter half of the 20th century

研究代表者

鈴木 正美（Suzuki Masami）

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：10326621

研究成果の概要：

20世紀後半における旧ソ連圏（主にロシアとチェコスロヴァキア）の非公式芸術（主に現代アート、前衛ジャズ、現代詩）とその周辺芸術（人形劇、人形アニメーション）に関して、現地調査を行い、基礎資料を収集し、それらをもとに研究を重ね、研究会および一般公開の講演会とシンポジウムを開催した。旧ソ連圏の美術、音楽、詩の表現者たちはジャンルの壁を越えて広く交流し、相互に刺激し合いながら、さまざまな表現行為を非公式な場で行ってきたが、そうしたジャンル横断的、地域横断的な非公式芸術に関するさらに発展的な研究の基礎を築いた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	660,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：外国文学、芸術諸学、比較文学、美術史、非公式芸術

1. 研究開始当初の背景

ロシア・中欧各国における1920-30年代の芸術のアヴァンギャルド運動については、十分とは言えないものの、かなりの研究が進んでいるが、1960年代以降のアンダーグラウンドでのアヴァンギャルド運動については、ここ数十年でさまざまな資料の掘り起こしが行われているものの、総合的な研究はまだ行われてはいない。また、個別の地域における研究、例えばロシアにおける非公式芸術など

は本国においてある程度研究されているものの、ロシア・チェコ・日本といった3国間での非公式芸術の受容や影響といった観点から行われた研究は皆無に等しい。

さらに、詩人の朗読とジャズとのコラボレーション、美術家によるパフォーマンスといったジャンルを越境する芸術については本国においてもほとんど研究されていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、20世紀後半のロシア・中欧における非公式芸術のさまざまな運動や事件を分析し、旧共産圏社会独特の文化的機能を明らかにすることにある。当該期間では、

(1) 美術、(2) 詩、(3) 音楽、(4) 人形アニメーション、という4つのジャンルを核にし、以下のように研究を進める。

(1) 1920年代のロシア、中欧におけるさまざまな芸術のアヴァンギャルド運動が20世紀後半の芸術に継承され、発展したことは周知の事実ではあるが、その詳細はまだ明らかではない。ソ連型社会主義リアリズムの影に隠れてアンダーグラウンドで展開した非公式の美術に関し、調査、分析する。

(2) 同様に、非公式芸術において言語実験の果敢な試みもさまざまな形で行われてきた。特に顕著なジャンルである詩や詩人について、その独特な作品を分析することで、当時の社会の言語文化の特質を明らかにする。

(3) ロシア・中欧における大衆音楽、特にジャズは欧米にはない独特の発展をした。共産圏のジャズを欧米との比較を通しながら、その国の民族性との関係性を考察し、音楽的特性、文化的特性を検証する。

(4) 旧ソ連とチェコスロヴァキアで独自の発展を遂げた人形アニメーションは、日本はおろか世界中の映像表現に影響を与えた。人形劇の歴史と発展の延長線上に位置づけられる人形アニメーションが社会・文化に果たした機能を調査・分析する。

以上4つの核は一見関係がないように見えるが、実はどれも密接に関係している。画家であると同時に詩人であった芸術家は数多い。詩人であっても本業はアニメーションの脚本家であった者、音楽家でありながら画家としてもすぐれた作品を残した者もいる。詩人と音楽家のコラボレーション、アニメーションにおける音楽など、どれも複合的に絡み合っている。本研究では、これらを総合的に研究し、非公式芸術の全体像を明らかにしようと試みる。

3. 研究の方法

まず、研究代表者である鈴木正美を研究の統括者として、メンバーを下記のようなグループに分け、それぞれの領域で研究を進める。

(1) 非公式の美術研究グループ

鈴木正美・赤塚若樹・クラコフ

(2) 非公式の詩研究グループ

鈴木正美・スホーチン・クラコフ

(3) 大衆音楽研究グループ

岡島豊樹・レートフ・赤塚若樹

(4) 人形アニメーション研究グループ

赤塚若樹・鈴木正美・大井弘子

(1)のグループは、1960年代以降のロシア、中欧において非公式に展開したアヴァンギャルド芸術を扱う研究グループである。1920-30年代のロシア・アヴァンギャルドやチェコ・シュルレアリスムといった革新的な芸術運動が、いかに20世紀後半の芸術に継承され、発展したのかを検証し、60年代以降に現れた独特な非公式美術の全体像を明らかにしようとする試みである。ソ連型社会主義リアリズムとの対比を行いながら、アンダーグラウンドで展開した非公式の美術について考察する。本研究に関わる資料の現地調査・収集を行い、資料の分析をする。さらに、旧ソ連圏・共産圏における人的つながり、各国間の芸術家同士の独自のネットワークについても調査を行う。

(2)のグループは、(1)の美術と同様に展開した文学運動の中でも独特の展開をした詩を扱うグループである。さまざまな美術家たちと関わりながら、あるいは単独で、あるいは芸術家グループを形成して、詩的言語の実験はずっと続けられた。1960年代以降、公に大部数の詩集を発行できた詩人たちと対比しながら、アンダーグラウンドで展開した非公式の詩について考察する。美術と同じく、本研究に関わる資料の現地調査・収集を行い、資料の分析をする。さらに、旧ソ連圏・共産圏の詩人が国外で朗読会を開催した例は数多いので、こうした事実を検証するためにも現地での聞き取り調査を行い、世界の現代詩とのつながり、影響関係なども調査する。

(3)のグループは、ロシア・中欧における大衆音楽、特にジャズを扱うグループである。ロシア・中欧のジャズは欧米にはない独特の発展をした。その発生から発展までの歴史や大衆歌謡とナショナリズムの関係といった研究はすでにあるが、20世紀後半のジャズに関する本格的な研究はほとんどない。1960年代以降の公の娯楽的音楽の影に隠れ、あるいは表向きには公に認められている音楽だけを演奏しながら、アンダーグラウンドで実験的な音楽を行ってきた非公式な音楽家たちが多数存在した。彼らの多くは現在第一線で世界中で活躍している。こうした共産圏のジャズを欧米のそれと比較しながら、その国の民族性との関係性、音楽的特性、文化的特性を検証する。本研究に関わる現地調査・資料収集はもちろんのこと、現役の音楽家・音楽研究者たちからの聞き取り、実際の演奏現場の調査なども行う。

(4)のグループは、旧ソ連とチェコスロヴァキアで独自の発展を遂げた人形アニメーションを扱うグループである。現在も日本はおろか世界中の映像表現に影響を与

え続けているこれらの人形アニメーションは、スラブ圏の人形劇の歴史と発展の延長線上に位置づけられる。したがって、人形劇そのものの研究も視野に入れつつ、人形アニメーションが上記の美術・詩・音楽と密接に関わりあい・影響しあいながら発展したことを検証する。チェコのトゥルンカがロシアのプトゥシコから影響を受け、実際に関係があったように、ロシア・中欧各国での人的つながりや作品の影響関係も調査することになるだろう。さらに、日本の川本喜八郎や宮崎駿がロシアやチェコのアニメーションから多大な影響を受けたことから明らかなように、日本との関係という視点から人形劇・人形アニメーションについて考察することになる。

4. 研究成果

(1) 2006年度

- ①鈴木正美は2006年9月17日～28日、モスクワにおいて、研究協力者のスホーチン、クラコフ、レートフと共に研究内容・計画について会議を行った。研究上必要な基礎資料が多数提供された。
- ②10月19日にはオランダの音楽家アブ・バースを新潟に招き公開講演会を行った。これにより、アムステルダムにおけるロシア・中欧の芸術家たちの活動について新たな知見が得られた。
- ③11月23日には新潟において、赤塚若樹、研究協力者の副島輝人、岡島豊樹、横井一江による研究会と公開シンポジウム「前衛とネットワーク——非公式芸術の扉を開く」を開催した。当該テーマに関する貴重な意見交換がなされた。2007年1月23日には新潟において、大井弘子と研究会を行った。大井からソ連時代の人形劇に関する貴重な資料が提供された。
- ④鈴木正美と研究協力者の岡島豊樹は2007年3月24日～30日、モスクワにおいて非公式の前衛音楽に関する研究調査・資料収集を行い、数名の非公式芸術家に聞き取り調査を行った。

(2) 2007年度

- ①鈴木正美は2008年3月12日～20日、モスクワにおいて、研究協力者のスホーチン、レートフと共に研究内容・計画について会議を行った。
- ②10月26日には千葉大学で開催された2007年度（第57回）日本ロシア文学会総会・研究発表会プレシンポジウム「生きのびるためのアート」において「言葉と行為——二人のパフォーマーをめぐる」と題し、ロシアの非公式芸術を代表

するプリゴフとモナストゥイルスキイに関する研究報告を行った。これにより、日本のロシア文学研究者の間で、ロシア非公式芸術の重要性が認識された。

- ②研究協力者の大井弘子は2007年4月2日～6月30日モスクワのオブラスツォーフ国立アカデミー中央人形劇場に研究調査・資料収集のため滞在し、多くの文献・映像資料を収集した。また数名の人形劇芸術関係者に聞き取り調査を行った。これにより、当該分野での基礎資料がより充実したものになった。
- ③鈴木正美と研究協力者の堀川久子は2008年3月12日～20日、モスクワにおいて非公式の前衛芸術に関する研究調査・資料収集を行い、数名の非公式芸術家に聞き取り調査を行った。またヴァシーリエフ劇場（および附属演劇芸術学校）において前衛舞踏関係者にも聞き取り調査を行った。これにより、ロシア本国での研究協力者がさらに増え、我々の研究が非公式芸術関係者の多くに認知されるようになった。

(3) 2008年度

- ①2008年12月6日～16日、研究協力者のセルゲイ・レートフ、ミハイル・スホーチンを招聘し、東京（東京工業大学、世界史研究所等）と新潟で4回の講演と研究会を開催した。12月12日には新潟大学において国内の研究協力者と共に一般公開の国際シンポジウム「1970～80年代の旧ソ連圏の非公式芸術」を開催した。これにより、旧ソ連圏の非公式芸術に関する我々の研究の重要性が公に認知されることになった。
- ②鈴木正美は2009年3月13日、モスクワにおいて、研究協力者のスホーチン、レートフと共に研究内容・研究成果について会議を行い、今後も本研究を継続・発展させていくことを確認した。

(4) 研究成果の刊行

- ①本研究の成果の一部をまとめ、研究成果報告書「現代ジャズ文化研究」(1)を発行した。現在2冊目の研究成果報告書を編集・制作中である。これらの研究成果は鈴木正美のホームページで順次公開している。
- ②非公式の美術研究グループの研究成果として、鈴木正美と赤塚若樹は次の論文、著作を公刊した。
 - a) 鈴木正美「ペテルブルグの芸術——美術都市と反コンセプトチュアリズム」(望月哲男編『創造都市ペテルブルグ：歴史・科学・文化』北海道大学出版会)。これにより、ペテルブルグにおけ

る非公式芸術の特質の一端が明らかになり、一般読者にも当該分野に対する関心が広がった。

b) 赤塚若樹「20世紀チェコのアート・シーン、——ヤン・パトチカを出発点として」によって、チェコの現代アートに関する知見が公になった。

③非公式の詩研究グループの研究成果として鈴木正美は次の著作、論文を公刊した。

a) 『どこにもない言葉を求めて——現代ロシア詩の窓』（高志書院）。これにより、我国における現代ロシア詩に関する研究が一步前進したと言えるだろう。学会誌の書評でも取り上げられ、高い評価を得た。

b) 「詩情が立ち現れる時」（栗原隆編『芸術の始まる時、尽きる時』東北大学出版会）。これにより、ロシア詩と日本の詩における詩の発生観の共通点が明らかにされた。

c) 「ロシア文化論——言葉の身体性とヴィジュアル・ポエトリー」（栗原隆編『人文学の生まれるところ』東北大学出版会）。これにより、ロシアにおけるヴィジュアル・ポエトリーの特質の一端が明らかにされた。

また、研究協力者のミハイル・スホーチンによる講演原稿「書かれた言葉の二つの傾向（具体詩について）」は研究成果報告書（2）および本研究プロジェクトのWebサイトで公表する予定だが、これはロシア人研究者による当該にテーマに関する論文の我国における最初の刊行物となる。

④大衆音楽研究グループの研究成果として鈴木正美は次の著作、論文を公刊した。

a) 「ロシア・ジャズ——寒い国の熱い音楽」（東洋書店）。本書はロシアにおけるジャズの歴史を簡潔にまとめた我国で最初の著作である。本書は学会誌でも書評に取り上げられ、高い評価を得た。研究者だけでなく、広く一般にも当該分野の魅力が認識された。

b) 「1960年代のジャズ・フェスティバルと聴衆」（望月哲男編『共産圏の日常世界』北海道大学スラブ研究センター）。これにより1960年代の音楽の発生と受容の一端が明らかにされた。

c) 「ラフマニノフからマルトウイノフへ——儀式性とミニマリズム」（『ユリイカ』第40巻第6号）。現代ジャズと現代音楽の関係について、その一端を明らかにした。

d) 「音楽的身体とパフォーマンス」（『テクストと身体』北海道大学スラブ研究センター）。ロシアの現代ジャズやパフォーマンスにおける身体性を明らかに

しようとした初の試みである。

また、研究協力者のセルゲイ・レートフによる講演原稿「ソ連、ロシア、ポスト・ソビエト空間における新即興音楽」は研究成果報告書（2）および本研究プロジェクトのWebサイトで公表する予定だが、これはロシア人研究者による当該テーマに関する論文の我国における最初の刊行物となる。

⑤人形アニメーション研究グループの研究成果として、大井弘子は「演劇と教育」2008年7月号から10月号に「ロシアで出会った人形劇」を3回にわたって発表した。これにより、ここ20年以上ほとんど紹介されることのなかったロシア現代人形劇の一端が明らかにされた。

⑥本研究報告集（1）『現代ジャズ文化研究——ヨーロッパ・ジャズを中心とする比較文化論的考察』では、次の5つの論文をまとめている。

a) アンタナス・ギュスティス「リトアニアにおけるジャズ文化」

b) 北里義之「集団即興するオーケストラの類型学」

c) 横井一江「ネットワークキングの試み」

d) 岡島豊樹「モスクワ・ジャズ2007」

e) 鈴木正美「ロシア・ジャズ研究の現状と課題」

これらは旧ソ連圏のジャズ文化をヨーロッパのジャズ文化との関係から考察したものとしては日本で初めての試みであり、音楽関係者からの注目を集めた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

① 鈴木正美、ラフマニノフからマルトウイノフへ——儀式性とミニマリズム、ユリイカ（青土社）、第40巻第6号、178-186頁、2008年、査読無。

② 鈴木正美、音楽的身体とパフォーマンス、21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集No.19「テクストと身体」（北海道大学スラブ研究センター）、122-137頁、2007年、査読無。

③ 赤塚若樹、20世紀チェコのアート・シーン、——ヤン・パトチカを出発点として、思想（岩波書店）、1004号、169-188頁、2007年、査読無。

〔学会発表〕（計2件）

鈴木正美、言葉と行為——二人のパフォーマーをめぐって、2007年度（第57回）日本ロシア文学会総会・研究発表会プレシンポジウ

ム「生きのびるためのアート」、2007年10月26日、千葉大学。

〔図書〕(計6件)

- ① 鈴木正美、人文学の生まれるところ、栗原隆編、東北大学出版会、2009年。(共著) 総359頁(担当部分「ロシア文化論—言葉の身体性とヴィジュアル・ポエトリー」、p. 67-p. 89)
- ② 鈴木正美、共産圏の日常世界、望月哲男編、北海道大学スラブ研究センター、2008年。(共著) 総156頁(担当部分「1960年代のジャズ・フェスティバルと聴衆」、p. 47-p. 58)
- ③ 鈴木正美、芸術の始まる時、尽きる時、栗原隆編、東北大学出版会、2007年。(共著) 総459頁(担当部分「詩情が立ち現れる時」、p. 73-p. 105)
- ④ 鈴木正美、創造都市ペテルブルグ：歴史・科学・文化、望月哲男編、(北海道大学出版会、2007年。(共著) 総269頁(担当部分「ペテルブルグの芸術—美術都市と反コンセプトアリズム」、p. 185-p. 209)
- ⑤ 鈴木正美、ロシア・ジャズ—寒い国の熱い音楽、東洋書店、2006年。(単著) 総63頁
- ⑥ 鈴木正美、どこにもない言葉を求めて—現代ロシア詩の窓、高志書院、2006年。(単著) 総188頁

〔その他〕

- ① 鈴木正美、国語の詩、26ヶ国から収集、北海道新聞、2006年5月9日
- ② 鈴木正美、不条理な世界リアルに(ロシア芸術のいま3)、北日本新聞、2006年7月24日
- ③ 鈴木正美、刺激的なワニの研究、北海道新聞、2006年7月25日
- ④ 鈴木正美、民謡は現代ロシア・ジャズの源、すばる、2006年7月号
- ⑤ 鈴木正美、ブラートフ作品一同に、北海道新聞、2006年10月10日
- ⑥ 鈴木正美、町あげてジャズを応援、北海道新聞、2006年12月26日
- ⑦ 鈴木正美、現代美術市場 再び活況、北海道新聞、2007年3月20日
- ⑧ 鈴木正美、音楽と美術の融合、北海道新聞、2007年6月5日
- ⑨ 鈴木正美、音楽家と共演 前衛詩人逝く、北海道新聞、2007年8月21日
- ⑩ 鈴木正美、人形劇の歴史伝える良書、北海道新聞、2007年11月6日
- ⑪ 鈴木正美、千一編の詩集 直筆で出版、北海道新聞、2008年1月29日
- ⑫ 鈴木正美、活況呈する現代美術、北海道新聞、2008年4月15日
- ⑬ 鈴木正美、美術、評論、詩…多才な芸術

- ⑬ 家の死、北海道新聞、2008年7月15日
- ⑭ 鈴木正美、個性あふれる芸術的人形、北海道新聞、2008年10月21日
- ⑮ 鈴木正美、緒に就いた前衛芸術の研究、北海道新聞、2009年2月3日
- ⑯ ホームページ
Masami Suzuki's Web Site
<http://www.human.niigata-u.ac.jp/~masami/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 正美 (Suzuki Masami)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：10326621

(2) 研究分担者 (2006-2007年度)

赤塚 若樹 (Akatsuka Wakagi)
首都大学東京・都市教養学部・准教授
研究者番号：80404953

(3) 研究協力者

- ① 岡島 豊樹 (Okajima Toyoki)
スラブ・東欧音楽研究
- ② 大井 弘子 (Ooi Hiroko)
ロシア人形劇研究
- ③ アンタナス・ギュスティス (Antanas Gustys)
リトアニア・ジャズ研究
- ④ セルゲイ・レートフ (Sergey Letov)
ロシア・ジャズ研究。音楽家。
- ⑤ ミハイル・スホーチン (Mikhail Sukhotin)
現代ロシア詩研究。詩人。